崩れし楽園から生まれし怪物

次の日、アルレットはとある貴族の家に買われていった。残されたのは身分すら変えるであろうお金だけ。

先日、市場で見始められたアルレットは、幾度かの誘いを断りながらも、積み上げられていく自身の購入金に対して、とうとう頭を下げたのだ。

すべては、アルを幸せにするために――

アルは止められなかった。屈強な男に連れて行かれる姉を。

アルは言えなかった。「置いていかないで。１人にしないで」と。

アルは、一人ぼっちに鳴ってしまった。『解放奴隷』という身分と、暫くの生活に困らない程度のお金と引き換えに。

「よお久しぶりだな解放奴隷のアルくん」

カイルとファヴェーラが仕事帰りにアルの家を訪れた。アルは生気のない顔で彼らを迎え入れる。

「……ぼろいのは相変わらずか。つーか掃除しとけよ」

ぱぱっと総意を始めるカイル。ファヴェーラは不動。あまり家事全般が得意でないのだ。その点カイルはある程度なんでもこなせる。

「はい、アル」

ファヴェーラがアルにりんごを手渡そうとする。もぞもぞとそれを受け取ろうとするアルの手を、掃除中のか要るが叩いた。

「死んだ魚に食わせるりんごはねえよ」

「……私がぬ寸だやつ」

ぼそりといった言葉は無視して、カイルはアルをにらみつけた。

「別に働けとは言わねーよ。もうお前は誰のものでもねーし、身分も『解放奴隷』だ。扱いは市民に劣るが、つれー労働とはおさらばさ。うらやましいぜ畜生」

カイルはアルの襟首を引っ掴む。

「でもな、んな死んだ目してんじゃねーよ。だらだら行きてんじゃねーよ。誰のお陰で、自由の身になったと思ってんだ！？アア！？誰が人生投げ売って金作ったと思ってんだ！？あの人が不幸を背負った分、せめてテメーは幸せにならなきゃダメだろうが！このスカタン！」

カイルの怒声が小さな襤褸小屋に響き渡る。ファヴェーラは止めない。

「でも、もう、ねえさんは」

ぐずるアルにカイルの頭突きが炸裂した。これにはさすがのファエーラも驚く。

「そんなぐだぐだ言ってる暇があったら働けよ！働いて働いて、お前がアルレットさんを買ってやれ。それが恩返しってもんだろうが！」

アルは目を見開いた。盲点だったのだ、姉を、買い戻すということ。あまりに現実感がない。不可能に等しい――奴隷にとっては。

「解放奴隷は、制約はきついけど市民に近い。労働賃金は奴隷の比じゃない。容易じゃないけど、不可能ではない。必要なら、私も手伝う」

「つーわけだ。どうすりょ、やせっぽっちの騎士さんよぉ」

アルは自分を恥じた。自分などよりよっぽど自分と、姉のことを考えてくれていた２人の共に合わせる顔がない。そして、深い感謝の念が溢れる。

「ありがとう。僕、働くよ。頑張って働いて、ねえさんを買うんだ」

アルの目に灯がともる。それをみて、カイルは少し照れながら、倒れているアルに手を伸ばした。

「悪かったなやりすぎた。でもよ、恩返しできる相手のいるうちは……諦めんなよ」

カイルは天涯孤独である。家族の生死不明。おそらく死んでいる。音があったとしても、永遠に帰すことなど出来ないのだ。それを知るからこそ、カイルは本気でアルに向き合った。まだ、親友は間に合うのだから。己と誓って。

「ああ、ありがと親友」

伸ばされた手を力強くアルは握りしめた。がっしり握られた手には活力が溢れていた。カイルが「よっと」とアルを引っ張り起こす。

「ファヴェーラも、ありがと」

「うん。私も。友達だから」

表情のない顔。しかし感情がないわけではない。その無表情に込められた感情を、アルは理解している。

「そんじゃあ親友君。働いた後でとても疲れた友達２人に、ちびっとご馳走しておくれ」

「うちにはろくなものないよ。パンと水くらいしか」

「材料は、ある」

ファヴェーラが後ろてから袋を差し出す。その中には、適当にかっぱらってきたのだろうとりとめのない食材がずらり。アルとか要るは顔を合わせて笑う。それを見て「……」無言無表情だが、ちょっぴり不機嫌な様子のファヴェーラが２人を睨んでいた。

「あはは、ごえんよファヴェーラ。任せて、僕が腕によりをかけて２人に振る舞って見せるから……ねえさんの見よう見まねだけど」

アルが腕まくりして、狭苦しい調理場というにはあまりに貧相な場所に立つ。その背をカイルとファヴェーラが見守る。

たとえ失敗してもいいのだ。アルは自分から動きたことにこそ意味がある。それに自分たちも奴隷身分である。下層の人間である。ちょっとくらい失敗しても、美味しく頂いてみせるという自負があった。

「うげえ」

「まず、うま……まずい」

アルの初料理は、食材が意味不明な食べ合わせだったことも手伝い、泥水すら美味しくいただける彼等の舌をも凌駕した。

「く、ははは、ほんっと糞不味いなこれ。つーかくせえよこの果物」

「一番効果なやつだった。あの店は詐欺」

「泥棒に詐欺呼ばわりされるとはな。まあこのくせえのを高く売るのは詐欺だ」

「と、とげとげしてて剥くのが痛かったのに、中身がくさいなんて酷いよ」

２人でも狭い家に、三人で騒ぎながら食卓を囲む。１人だった孤独も薄れ、不思議と力が湧いている。家族とはまた違う、友達という和が、そこにはあった。

「あははははは」

アルに笑顔が戻った。

彼の心からの笑顔は、もしかするならば、この時期が最後だったのかもしれない。

アルの家からの帰り道、カイルとファヴェーラは並んで歩いていた。

「……一応、カイルの耳に入れておく」

「ん、何だよ急に」

基本的にアルと三人でいる時以外、会話らしい会話などない２人である。特にファヴェーラから話題を振ってくることは珍しい。

「アルレットさんを買った貴族、ブラド伯……問題がある」

「問題って……おい、まさか」

「覚悟は、必要」

カイルは髪の毛をかきむしる。自身にとっても憧れの対象であるアルレット、そして親友の不遇に対する怒り、やり場のないそれを発散させているのだ。

「やるせ、ねえなあ」

月明かりが、雲に覆われ、闇の帳が重くのしかかる。

アルは精力的に働いていた。字が読めない、学のないアルができる仕事は、やはり仕事や単純作業。それほど賃金は上昇しなかったが、目標のある人間は強い。

「必ずねえさんを取り戻す！」

その不断の決意の舌、アルは徹底的な節約と貯蓄を出していた。

ある日の事である。家の前に人が立っていた。ズタ袋を担いだ男がアルのエイエの前に立つ。そのことに疑問を浮かべながら、アルは声をかけてみる。

「すいません。うちに何かようですか？」

アルの方を見る男。ゴミ虫を見るような視線は、アルとて何度も経験している。

「ほらよ汚らわしい奴隷のガキ」

ズタ袋を投げつけられ、むっとするアル。

「僕は解放奴隷です」

「ふん。それで人間様になったつもりかよ。いいか、お前らは一生人間にはなれない。奴隷は奴隷のままだ。解放奴隷だって飼われてないだけで非人間にゃ違いねーんだよ」

この意見は珍しいものではない。この国の、おそらく市民以上の大勢が同じ意見を持っている。この手の罵声は慣れたものであるが、嬉しいものではない。

「……この袋はなんですか」

問答を続けてもむだ。アルは必要なことだけを聞く。男もまたさっさとこのスラム街というべき場所からさりたいのか、必要以上に罵倒する気はないようだ。

「あの方は玩具を壊しすぎてな、領地ならともかくこの王都では処分場所にも困る。だからこうして僕が元あった場所に返しに来たんだ。ったくめんどくせえ」

玩具、アルの耳に不思議にこびりついた響き。元あった場所というのも気になる。

「どういう、意味ですか？」

男は不快げなかおでアルに視線を合わせた。

「どういう意味も糞もねえよ。察しの悪いがきだな。ブラド伯の買ったガンクが壊れたから元の場所に返しに来た。あとはそっちで処分しとけ、以上」

男はそう言い捨てて、その場を去る。

残されたアルは、そのズタ袋に、恐る恐る手を伸ばす。

心臓が早鐘のように鳴り響く。これ以上ふれてはいけない。近づいてはいけない。

とっくに理解しているのだ。中身を、理解したうえで、見てはならない。見るべきではない。見ずに処分すべき。川にでも流せばいい。埋めてしまえばいい。そうすべきなのに――

アルは、その袋を開けてしまった。中身は――

「お、おぅっぷ」

一瞬耐えた。しかしほんのり腐臭を帯び始めている『それ』を、理解した瞬間、アルは耐えきれず井の中のものをすべて撒き散らした。胃液がのどを焼く。地面には水っぽい吐瀉物の海。

「あ、あ、あ、あ」

壊れかけの心が断末魔の声を上げている。何もかも放り出してこの場から消え去りたい衝動に駆けられる。忘れよう、忘れて、明日から希望に満ちた明日を送ろう。

カイルとファヴェーラと三人で――

だってもう、アルレット姉さんは――

「ああそうだガキ。……ってきたねえなおい！？」

なぜか戻ってきた男。アルは虚ろな目を上げる。

「壊れた『それ』の処分代だ。受け取っとけ」

アルの芽の前に銀貨イチマが投げ渡される。アルの視線は男に向かいたまま、

「なんで、どうして……」

ぶつぶつつぶやくアルを見て、男は唾を吐きかけた。

「なんでもどうしてもあるかよ。買ったものをどうしようが伯爵の勝手だ。伯が買って伯が壊した。処分がめんどくさいから駄賃まであげてる。いったい何が不満なんだ？金か？金がほしいのか？この業突く張りが、これだから奴隷は好かん。対価求めぬ分、生まや牛のほうが何ぼもマシだ。このクズども」

男は好き放題吐き捨てたあと、ズタ袋を蹴飛ばした。中から、手足を失った死体が飛び出してくる。それが運ぶために切り取られたものか、生前切り取られたものなのか、アルは分からない。わかりたくもない。

「そういやこの女、結構美人だったな。あーあもったいねえ。もし貴族に生まれてりゃあちやほやもされたろうに。まあ、しょうがねえ、奴隷なんだしょ」

そう言って男は今度こそ踵を返して去っていった。

残されたのは呆然と立ちすくむアルだけ。貴族に生まれていれば、奴隷じゃなければ、２つの言葉がぐるぐる渦巻く。非人間、アルはようやくその意味に至った。今まで知ったつもりでいたことを、目を背け続けていたことを――

「……そうか」

アルは知った。

「……そうだったのか」

アルは知ってしまった。

「く、くく、くはははははあははははははははははあはははははあ！」

狂ったように笑う。アルの心はこわれてしまった。もう二度とと元には戻らぬくらい。木っ端微塵に砕け散る。むしろ自ら心を砕くように狂気を増す。

「僕らは人間じゃないんだって。可笑しいよねえ、ねえさん！だってほら、僕にも赤い血が流れている！」

アルは二の腕を抱きしめるように掻き毟った。爪あ皮膚をえぐり、中から血が滲む。

「２つの足で立っているし、両の腕もついている！指も五本あるし、目も２つ。鼻も耳も口も、み～んな同じなのに僕らは人間じゃないんだっ！！！」

絶叫するアル。

「亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜亜ッ！」

血の涙を流し、漆黒の髪に白髪が混じる。憎悪、憤怒、諦観、絶望、さまざまな感情が渦巻き、それが凄絶な表情を生み出す。アルは壊れた。おそらくは姉もそうなったであろう。人を超え、獣へと――

「……それじゃあ駄目だ」

しかし、アルはぎりぎりのところで踏み止まった。獣では駄目なのだ。獣に人は壊せても、獣に人の社会は壊せない。文明に淘汰された歯医者に落ちては意味がない。

「それじゃあ人じゃないって自分が認めてるもんじゃないか、うん」

それをアルは直感で理解したのだ。

「オーケー、僕は落ち着いている。僕は人間だ。少なくとも、僕らが僕らをそうであると思わなきゃ意味がない。そうでしょ、ねえさん？」

変わり果てた姉を、以前と変わらぬように抱きしめる。

「さっきは履いちゃってごめんよねえさん。再開してうれしくなっちゃってさ、つい吐いちゃったんだ。あはは、おっかしいよねえ。大丈夫、年産は世界一綺麗だよ」

手足をもがれ、歯が折れ、乳房は断たれ、耳は削がれ、眼球はくり貫かれ、死の間際の表情の極み、加えて死後ほどほどの時間が経過しており、負債も漂い始めている。しかしあるは美しく見える。誰よりも美しい姉が帰ってきたのだ。

「おかえりアルレットねえさん。さあ、お家に帰ろう。二人一緒にならなきゃ駄目なんだ。一緒ならなんでもできる。二人ならきっと」

アルはアルレットを担いで、家の中に入る。

銀貨は捨て置く。あれを受け取るわけにはいかない。あれはアルレットを買い取った金と意味合いが異なる。アルレットが自身の覚悟でてに入れたお金と、玩具の処分代。後者を受け取るわけにはいかない。銀貨一枚というはした金で、姉を玩具に落とすわけにはいかないのだ。

「僕らは本当に人間じゃないのかな？それとも人間なのかな？知りたいんだ。知らなきゃいけないんだ。だからさ」

アルは戸を占める。中には姉と二人っきり。懐かしの家族、二人ポッチの小屋。隙間だらけの壁、粗末な食卓、そしていつも二人で目ムッタ狭いベッドに姉を優しく寝かせた。

「見ていてねえさん」

そしてアルは徐に口を開き――

「僕の中で」

アルは初めての業を背負う。

「アル！？」

アルの家が燃えていた。火が轟々と立ち上り、ちっぽけな小屋などたやすく飲み込んでいく。すべての思い出を灰燼にする。

「カイルか？そんな大声をだすなよ」

カイルが超えのしたほうに視線を移すと、ぱっと見知らぬ男が立っていた。炎に映える美しい白亜の髪、怖じ気のするほど美しい少年がそこに立つ。

「アル、なのか？」

恐る恐るカイルは問う。くすくす笑う少年。

「当たり前だろ？変なカイルだなあ」

カイルは震えていた。何が起きたか、カイルは大体理解している。後ろに付いてきたファヴェーラがギルドのルートで仕入れた情報、ブラド伯爵の悪癖によりまたひとつ奴隷が殺された。それは黒髪の美しい奴隷であったということを。姉が死んだのだ。アルにとって間違いなく最愛であるはずの姉が、なのに――

「ファヴェーラも久しぶり。最近忙しくて会えなかったから寂しかったよ」

なのにアルは恐ろしいほど普段通りなのだ。平静を保っている。否、保っているのではない。平静なのだ。一切の揺らぎなく、アルはそこにいる。

「そろそろね。住む場所を変えようと思ってたんだ。ほら、一応そこそこ金はあるしさ」

だから燃やしたのだと言わんばかり。平静だが、間違いなく狂っている。

「やりたことができたんだ。それにはさ、今のままじゃ駄目なんだ。もっと知識が要る。もっと力が要る。子どものままじゃ駄目だ。だから、ね」

アルは自身の家、燃えゆるそれを見る。

「バイバイしなきゃ。そうでｈそ、ねえさん？」

あるは自身のお腹を擦った。まるで中に何かがいるかのように。そのシクサをカイルはぎょっとして見ていた。カイルもファヴェーラも問えない。姉の死体を、何処へやったのか、を。それが想像通りであったなら、なんという常軌を逸した行動なのだろうか。

「やりたいことってのは……なんなんだ？」

カイルが搾り出した問い。それにたいしてアルはニッコリと無邪気な笑みを浮かべた。

アルは白い髪を棚引かせ、炎を、生家を、思い出を背に宣言する。

「上を目指す。僕が、いや、僕たちが人間なのかを知るために！」

炎が高らかに燃え上がる。カイルは知った、もうあの頃のアルは死んだのだ、と。姉譲りの黒髪が似合う優しき少年は死んだのだ、と。今此処にいるアルは――

『白の復讐者』である。